

水球女子日本代表として初の五輪に挑んだ先生がいる。横浜市鶴見区の白鵬女子高教諭で、ベテランゴールキーパーの三浦里佳子(31)＝日体クラブ。競技人生の区切りとして迎えた東京大会で悲願の勝利はつか

めなかったが、競技に、仕事に、ひたむきな姿を見てきた同僚はねぎらいの言葉を贈る。「実直な頑張り屋。本当にお疲れさま」
(武田 晃裕)

水球女子代表 横浜で高校教諭

「実直な頑張り屋」

平日午前8時すぎ。職員室で朝会が始まると、同校教諭の大野恵美子さんの心がふっと和む。

「一目見れば、直前までプールにいたんだと分かるので」。そこにはいつも、早朝の自主練習で髪をぬらしたままの三浦がいた。

水球部の副顧問を務める2人。三浦はコーチとして部員の指導に当たり、普段は保健体育の授業を受け持つ。数学担当で競技経験のない大野さんは、後輩を温かく見守ってきた。

多忙な日々の合間を縫って練習する三浦から、後ろ向きな言葉を聞いたことがない。「それどころか何かあれば真っ先に手伝ってくれる。困っている人を放っておけない性格なんです」

大きな荷物を抱えていれば、すぐ駆け寄ってきて受



白鵬女子高水球部員と記念撮影に納まる三浦(後列右)＝2019年8月(大野さん提供)

でも、三浦はい上がって代表に返り咲き、憧れの舞台にたどり着いた。

代表復帰が決まった後に開かれた学年集会。12クラスへの担任が順に生徒約300人に言葉を掛けていく。時間の経過とともに緊張感が薄れていったその時、三浦がマイクを握った。

「私は一度、挫折を味わった。でも、諦めなければ夢はかなう」。しばしの沈黙の後、生徒から自然と拍手が湧き起こったという。

「教員になって初めて見た光景でした。いつでも一生懸命な人柄は全員が知っているし、心を込めて語った言葉だから生徒の心に響いたんでしょ」

そう振り返り、大野さんは続けた。「夢の舞台に立った経験も伝えてもらいたい」。皆がその帰りを楽しみに待っている。

け取り、学校説明会の前日。デジャネイロ五輪の世界最には一人で黙々と床や壁の掃除に励む。実直な人柄をバーから外れた頃だ。表す逸話には事欠かない。

ただ、三浦も失意に暮れた時期がある。前回のリオ

挫折越え三浦「夢はかなう」